

巻頭言

木製のトラウベ

医学研究科長兼医学部長
石河 修 (いしこ おさむ)

所属：医学研究科女性病態医学
専門分野（婦人科腫瘍学、 女性骨盤底医学）



40年ほど前、私は大阪市立大学医学部を卒業し、産婦人科医としての一步を踏み出した。卒業後1年目は産科学、2年目は婦人科学を研修するのが、当時の教室の取り決めであった。

そこで、私はまず「正常妊娠の診断」と向き合うことになった。現在では妊娠に疑いをもった女性は薬局で妊娠診断キットを購入し、尿中のhCG（ヒト絨毛性ゴナドトロピン）を測定し、陽性と判定されれば産婦人科を受診する。産婦人科医は超音波断層検査で胎児心拍の拍動を確認し、胎児のサイズを計測し、現在の妊娠週数と分娩予定日を診断する。この診断手順は医療先進国であっても後進国であっても世界共通である。

ところが僅か40年前の「正常妊娠の診断」は残念ながら世界共通ではなかった。医師専用の妊娠診断キットがやっと認可されたところで、感度が低く、凝集反応で判定するため、判定に苦慮する場合も少なからずあった。正常妊娠と診断するための大事な項目である胎児心拍の確認は新米の医師にとってはハードルの高いものであった。超音波断層測定装置は日本には存在せず、トラウベと称する木製の器具（両端がラッパ状に開口した全長20cmほどの木製円筒）を用いて経腹的に胎児心音を聴取し、聴こえれば正常妊娠と診断した（妊娠5～6か月頃に）。

現在の若い産婦人科医にとって「正常妊娠の診断」は、高感度尿中hCG測定キットと超音波断層測定装置という医療機器の開発により、今や何の困難もなくなり、診療に取り組めるようになった。

産婦人科医がまず修得する「正常妊娠の診断」に関する技術の目覚ましい発展は、この間の本邦を含めた世界での医と理工との連携の成果に他ならない。この40年の進歩の過程を、身をもって体験した私にとって、あらためて感謝申し上げたい。

しかしながら、若い産婦人科医らが現在の診断技術を感謝することなく当たり前のもにとらえ、更に改良進歩させる努力を怠ったとき、測定キットや断層装置は、40年前日本全土の産婦人科で何の疑問も持たず使用されていた木製のトラウベと同じ運命をたどるかもしれない。